

国内研修を終えて

① 災害対策について考えたこと

お世話になっている社協職員の方に、車でどこか観光に連れて行ってやるとの誘いを受けた。藤里町は白神山地に隣接しているので、僕が「白神山地に連れて行ってください。」と頼むと、「道が土砂崩れしていて危険だから駄目だ。」と言われた。いざ車でとなるとどこへ行けばいいのか困惑している僕達はダムへと連れて行かれた。藤里町にある「素波里ダム」の中の水は少ない様子で、今年は水不足だという話を伺った。藤里町だけではないけれど、土砂崩れであったり、水不足であったり、今年は異常気象のようだ。そこで、もしここが災害になったらどうなるのだろうと疑問が浮かんだ。以前は「災害」と「福祉」とを絡めて考えると、何となく「復興支援」と短絡的に直結させている自分がいた。それも大切なことだが、社協の様な福祉機関としては、自身の地域を守ることを第一に考えなければならない。あまりにも非現実的で考えもしなかった。ここ最近、茨城県常総市の鬼怒川決壊による水災害に多くの注目が集まっている。ニュースでは市役所などの行政だけでなく、社協の様な民間組織が災害対策に取り組む様子を垣間見た。もし藤里町にあの規模の災害が起こったならば（ただでさえ藤里町は水災害が頻繁に起きている。）を仮想してみた。

先ず、マンパワーの不足しがちな地域では外部からの労働力の補充に頼らねばならないだろう。市町村・県社協、行政との連携が必須である。寄付金の窓口も設置しなければならない。茨城県常総市では、ボランティアセンターに寄付金やボランティアに対する問い合わせが殺到し、鳴りやまない電話に対し少ない職員では対応しきれないらしい。それは、良いことであるが、受け入れるだけの余裕を前もって作る必要がある。わかりやすい案内作り、混乱しないための支援受け入れ体制の整備が課題としてある。また、問い合わせが一カ所に集中しないためにも、受け入れの窓口を増やすことも大切だ。信用金庫や地銀にもしものときは窓口を代行してもらう様に頼んでみるのもいいかなと思う。労働力不足である反面、小規模な閉じたコミュニティであるからこそ地域間の連絡が取りやすいかもしれない。町内名簿が作成されているならば安否確認に大きく活躍するはずだ。だが、一人暮らしの世帯には防災訓練の啓発や災害対策を重点的に地域で連携して行う必要があり、山間部などの人里離れたところに住む人は安否確認の連絡手段や、避難情報が入る環境を整備する必要がある。

だが、災害対策のためのシステム作ればいいってわけでもない。「荻上チキ Session22」というラジオ番組で東日本大震災での被災の様子を語り部達から聞いた。地域の町内会規

模で防災訓練は行われていたが、ほとんどがセレモニー化されていたらしい。実際に避難する時も「ここまで波は来ないだろう。」という油断があったあり、「もしここまで津波が来ても、年寄りには助からない。」といった諦め、なんならば「もう充分生きたわ。」と真意は定かではないが、訓練が行われていても、機能しない現実が沢山ある。現実感や当事者意識が低下するなんらかの背景があるのかもしれない。加えて、コミュニティが結束していればいいものでもない。当然デメリットがあったりする。村社会的文化やみんな一緒主義が避難に関して怠慢や思考放棄をもたらす。大きな津波が来るだろうと考え、みんなが逃げる方向とは逆の高台を目指し避難したから助かった人もいるのだ。別に一人でも避難訓練を徹底して行うべき、コミュニティのしがらみから外れるべきと考えているわけではない。悲惨な災害や事故、事件が起きたならば、そこから教訓をきちんと得なければならぬと思う。それに対して「地域が結束していれば一、地域関係の希薄化が原因一予想もできないことでした。」といった短絡的な答えで済ましてはいけないと思う。

と言ってもだからなんなの、この先どうすればといった答えが全く見えてこない。災害対策意識が高まっても何十年も維持するのは至難の業だ。だが、社協ならではの役割がきっとあるはずだと思う。社協特有のネットワークで災害対策のシステムを作り、それが順調に機能しているかを評価できるのは住民との距離が近い社協だからこそできることであるし、地域リーダーを育成するのも社協の役割だ。藤里社協では災害ボランティア研修会を実施している。町民の信頼が厚いからこそ効果が期待できる。社協の中には参加者を集めてバスで一緒に被災地支援へ行く活動を行っているところが多くある。実際に見ることでボランティア側の意識も変わるだろうし、ボランティアから戻り地域の意識レベルを上げてくれるかもしれない。持続的に当事者意識を持つことが重要で、悲惨な出来事は忘れなければ前に進めないけれども、忘れてはいけないことが沢山ある。日本中どこでも震災のリスクはあるし、安全な場所などない。地域が目線で震災から地域を守ることが、近年社協に課せられた重大な課題ではないかと思う。

②交流会に参加して考えたこと

現代福祉学部生、役場職員、社協職員、地域町おこし協力隊を交えての交流会に参加した。情報交換のいい機会になったと思う。町民の方は、藤里町は特に監視的、村社会的だと言う。始めは学生が何人も来ることに地域住民は懐疑的であったらしい。今でこそ考えられないことだ。法政大学生が来るのが藤里町の恒例行事化を目指す僕たちにとっては、10年以上継続して訪問し続けた成果だ。去年交流した秋田看護福祉大学の学生も就職して青森にいるにも関わらず駆けつけてくれた。地域との関係作りは着々と進んでいるように思う。

そんな中で、「人を藤里町に呼び込む方法を考えよう。」という話題になった。それにつ

いての PR 方法や、藤里町特有の魅力を協同で考えた。空地进行貸し出す、白神山地で売り込む等の案が出た。就職活動を経たから思うことなのか、なんとなく市場性を感じた。地方創生だとか言われる今、地方は選んでもらう地域にならなければいけないらしい。ふるさと納税でお返しもので差別化を図ったり、大きな高齢者施設を建てて都内から利用者呼び込んだりと選ばれる地域になるためにどこも活発的だ。行政や社協は営利を目的とする組織ではないし、ノウハウ等を持たなければ骨の折れることなのだろうなと思った。同時に、現代福祉学部は無償性の側面が強いので営利の視点を持ってないように思った。無償性は強みであるが弱みでもあると思う。

③ おわりに

今回で、藤里町 6 回目の訪問になった。6 回目ともなると正直新鮮味は薄れてくる。それによって、見えることや考えることが変わってくる。大学 4 年生になったが藤里町とは今後とも未永く関わらせていただき、返礼を尽くす予定だ。顔見知りの方と再会する度に、自分はなんて幸福な体験をさせてもらっているのだとも思う。法政大学生の藤里町への訪問がこの先何十年も続けばなとも時折考えてしまう。

また、今年から生活困窮者自立支援法が始まったことにより、藤里町に注目が集まっている。藤里社協で活躍されている菊池まゆみさんは講演依頼で忙しそうだ。僕が就職活動の際、時事問題のテキストを読んでいたら藤里町の名前が出てきたり、いつも聞いているラジオ番組に電話でゲスト出演されていたりした。本も発刊され、僕達学生のことについても記述してある（示唆する感じではあるけれど）。鼻が高いような、凄い所へ関わらせてもらっているのだなと誇らしい気持ちになる。藤里町は自分にとって特別な場所であり、学部生として学び続けるための大きな原動力になっている。